

を、此信濃國に生るは、殊に色白くて名産なり、神樂歌にも、木綿造る科の原と見え、又諏訪神社の御裝束、鎧のおどし馬の飾、船の綱などにも用ふ、然れば科野てふ國名も、此木より出たるなり、今も級布、紙布、藤布、多布布などを出し、更級郡などは殊に楮を多く出し、今思ふに、此説もかたぐ、由あり、神樂歌に、木綿造る志那の原と云ふことは、古書に見えざれども、此國の方言にて、も有ぬべし、由あり、本は此木によりて地名にまれなほ、

〔諸國名義考上〕信濃

和名抄に、信濃之奈乃國府名義は、信濃國風土記に、往昔建御名方神等之所住之地也、治天下御神大穴持命、又少彥名命、建御名方命、巡行此國、給到坐阿羅野、詔此國者木葉草垣葉品々也、故云品野、今云信濃者音之轉也とあり、古事記傳には級坂シナサカあるゆゑの名なりとあり、こは古事記に、志那陀由布云々とある歌の志那は、坂路にて、陀由布は猶豫にて平らかならざるさまをいふよしあり、日本書紀景行天皇卷に、日本武尊進入信濃是國也、山高谷幽、翠嶺萬里、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、然日本武尊披烟凌霧、遙經大山、既逮于峯云々、また推古天皇卷に、有蠅聚集浮虛、以越信濃坂、鳴音如雷云々、また齊明天皇卷に、科野國言、蠅群向西、飛踰臣坂、大十圍計、高至蒼天云々、また日本紀略延長三年七月二十九日、東國民烟爲風多損、信濃御坂路壞云々、また萬葉集、信濃國防人歌に、知波夜布留賀美乃美佐賀爾、怒佐麻都里、伊波負伊能、知波意毛、知々我多米とよめるを始にて、後拾遺集、新古今集、又今昔物語などにも、信濃の御坂の事見えたり、此坂を級シナといへるなり、志那の約りは、佐にて、加は所なり、か、れば佐加は級所なるよし、古事記傳に見えたり、○中山根宗利といふ人、この國に行て、科布シナブの裁端キレハシを我方におこせたり、賤の衾などの料なりといへり、いと籠き布なり、和名抄に、調布、豆岐乃沼能、又有信濃、望陁等名云々、其體與他國調布頗別異、故以所出國郡名爲名也とあり、科木シナキより出たる國名か、國名より出たる調布の名か、本末をまらず、又思ふに、伊勢津彥といふ神、大風を起し立去りしより、伊勢國風土記上の伊勢國の條に引り